

## 主体的な学びの難しさ

今野裕子

亜細亜大学国際関係学部講師

現在の大学に着任し4年目を迎えたが、いまだにゼミのあり方について日々頭を悩ませている。

所属する学科では3・4年生のゼミを受け持っている。それぞれに「専門ゼミ」「総合ゼミ」という科目名がつけられているが、学生は実質2年間同じ教員について学び、最終的に卒業論文を執筆する。自身の担当するゼミは北米研究をテーマとして掲げており、例年アメリカやカナダの文化に興味のある学生を募集している。新型コロナウイルスの感染拡大前までは、2年次前期のアメリカ留学プログラムを利用する学生が多かったため、滞在先で培った経験や視野をベースに「もっとアメリカのことをよく知りたい」という動機を持った学生の集まる傾向があった。

右のように科目が設定されているため、ゼミの授業内容

を考える際には2年間にわたる学生の育成計画を練ることになる。そこで、学生が個別に調査テーマを見つけ、卒業論文執筆に向けた取り組みを3年次から行えるように授業を組み立てた。しかし、個々の学生が独立して調査を行うだけでは、ゼミというコミュニティの持つ利点を活かすことができない。少人数で率直に話し合うことで、学生が多様な意見や異なる視点を認識し、特定の問題に対する理解を深められることがゼミの醍醐味であろう。以上の点を加味し、自身のゼミでは所属するすべての学生が、3年次から各々の興味や追いたいテーマを研究計画や予備調査報告といった形で共有できるようにし、4年次には卒業論文の草稿を読んで互いにコメントを付け合うという形式を取ることになった。

さて授業の方法について形式を整えるところまでは教員の仕事だが、毎回のゼミでは学生が主役となって切磋琢磨するのが理想的なゼミのあり方であると常々考えてきた。ゼミは何かを習う場ではなく、作る場であって欲しいと願うからだ。一般的に大学での学びの特色として「主体性」という理念が掲げられることは多いが、現実には学ぶ姿勢が受け身な学生は多い。しかし、自分で関心のある

テーマを設定でき、なおかつ他ゼミ生からコメントをもらえるとなれば、主体的に取り組まざるを得ないだろう。当初はこのような見立てであった。だが、実際こちらが想定したほど学生が主体的に取り組んでいるかという点、当然ながら学生によって温度差がある。ましてやグループワークという形で討論を促そうとすると、この態度の違いが如実に表れる。

まず、個別のテーマ設定と予備調査の段階で早くも対象への向き合い方の違いが明確になる。学生個人の力量や熱意に差があるため自然なことではあるが、予想以上に成果物からモチベーションの有無が浮き彫りになる。主体的に取り組む学生が特に教員の指図がなくとも文献を渉猟し、問題に対する考察を重ね、積極的に質問をするのに対し、後れを取っている学生は教員から課された宿題を最低限の労力でこなしているようなアウトプットの仕方になってしまう。

本来ならば、これを補正してくれるのがゼミの役割であるべきだ。主体的な取り組みができない、あるいはそもそもどうしてよいかわからない学生を助けるための場がゼミだ。前述のようにこのゼミでは互いの卒論研究を途中経過まで含めて共有しているため、取り組みの良し悪しが直

接的に視覚化される。力量のある学生が模範となって他ゼミ生によい刺激を与えてくれることが望ましいが、学生同士遠慮し合って直截的な物言いを避ける傾向があり、また取り組みが消極的な学生もよい例から学ぼうとする意欲が十分にあるとは言い難い。

実際に卒論の執筆を始めて草稿にフィードバックを与え合う段階でも、状況は変わらない。積極的に発言しない学生は、原稿を読んできているのかすら定かではない。さらには何をどのように伝えれば建設的な助言になるのか、あるいは問題に対するゼミ全体での理解が深まるのかまで踏まえた「良質の」発言まで求めようとする、授業が成り立たなくなってしまう。当面はとにかく自由な雰囲気でも何でも発言させることを重視し、程よきところで介入して軌道修正するよう心掛けていく。

学生の主体性を育てることの難しさ、実のあるグループワークの困難さ、学生の自由な会話や発言と教員の関与のバランス。ゼミ運営に関わる難問は山積している。解決には教員の成長など時間を要するものもあるが、形式の微調整などを通じ、日々の実践の中から少しずつ改善してゆくしかない。

大谷大学国際学部 ・ 藤田 義孝「国際学部長」

# グローバル時代に必要な人間教育を担う

## 1 単科大学から4学部制へ

大谷大学は、1901年に「真宗大学」として開学以来、100年近くにわたって文学部の単科大学であったが、2018年には社会学部と教育学部を加えた3学部体制をスタートさせ、2021年に国際学部を新設したことで、開学120周年にして4学部の大学となった。この新体制は、それまで文学部の中にあった社会学科、教育・心理学科、国際文化学科を学部として再編することで教育の実相を外から見えやすくすると同時に、学部ごとに独自性のある教育の展開を可能とするものであった。では、仏教系大学として長い伝統を持つ大谷大学が、21世紀の今日、国際学部を設置する社会的意味とは何であろうか。

## 2 グローバル時代に必要な人間教育

現代社会で求められるグローバル人材とは、「日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」（文部科学省『産学官によるグローバル人材の育成のための戦略』、2011年4月28日）であるという。だが、この定義に含まれる「日本人としてのアイデンティティ」には実のところ大きな課題がある。なぜなら、従来のように共通の文化的・精神的伝統に立脚した「日本人」としてのアイデンティティの確立はもはや困

難だからである。日本の在留外国人はほどなく300万人に達しようとしており、うち永住者と特別永住者を合わせて100万人以上が定住している。つまり、外国人は既に日本社会のコミュニティ構成員となっているのだ。そうした中で、「日本人らしい日本人」のアイデンティティを前提とすることは、異文化マイノリティや、いわゆる「ハーフ」「ダブル」「ミックス」など外国にもルーツを持つ日本人の存在を不可視化する危険を孕むといえる。「内なる国際化」時代の他者理解に必要なのは、日本人のアイデンティティとは何かを反省的に問い続け、多様性を含む新たな日本人像の(再)構築を試みる開かれた知的態度なのである。

そのように他者理解へと開かれた自己理解を深めること、あるいは自己理解を深めて他者理解へとつなげること、あるいは自己理解を深めて他者理解へとつなげること、まさに開学以来、仏教精神に則った人間教育を伝統としてきた大谷大学の教育が目指すところである。なぜなら、仏教の精神において重視されるのは、深く自己を見つめること、他者を敬い理解しようとする努力を怠らないこと、自他が幸福に共生する社会の創造を目指すことであり、大谷大学ではこれを「本務遂行・相互敬愛・人格純真」の三 motto として長年大切にしてきたからである。この理念を、現

在は「Be Real — 寄りそう知性 —」という言葉で表現し、現実や己の真実に向き合い、他者に寄りそえる知性の持ち主であれという教育理念として発信している。それゆえ、グローバル化の現実と向き合い、他者との関わりの中で自己のアイデンティティを確かめながら、さまざまな背景をもつ人びとに寄りそえる真の意味での国際人を育成することは、建学の精神に沿った大谷大学の使命であり、同時に、現代および今後の日本において果たすべき社会的使命でもある。

したがって、大谷大学の国際学部では「グローバル」(グローバルローカル)をキーワードに、海外だけでなく京都の地域社会も学びの場として、身の回りの国際化に対応できる人、多文化共生社会を作る人の育成を目指すものである。

### 3 他者理解と共生のための宗教理解

仏教を基礎として展開される大谷大学の学びは、グローバル社会において、あるべき人間関係を考察する重要な手がかりを与えるものと考えられる。なぜなら、文化的に多様な人々が共存する社会において他者の人格を尊重するには、宗教への理解が不可欠だからである。宗教とは、広い意味において

人間が何を尊ぶべきかを定める価値体系であり、人間としての誇りある生き方、すなわち人間の尊厳の根幹を成すものである。このように「人間の尊厳」の定義と構成要件そのものが宗教及びその文化圏によって異なることを踏まえなくては、多文化共生は困難であると言わざるを得ない。

したがって、宗教的観点からも自己を深く見つめるとともに、他者を理解しようと努め、その過程でさらに自己理解を深めてゆく人物、身近な他者に寄りそえる知性と感性とを磨き続ける人物こそが、これからの時代に必要とされる真の国際人であると考えられる。それゆえ、大谷大学国際学部では、仏教に基づく生命への畏敬と尊重を学びの根底に置き、宗教をも含んだ多文化共生社会の創出に貢献しうる人物の育成を目指す。具体的には、全学生が1年次に仏教について学ぶ必修科目「人間学」に加えて、宗教と文化の多様性を理解するための学科専門科目「世界の宗教と文化」を置いている。

#### 4 学部・学科の構成と教育の特徴

国際学部には、1993年以前の旧文学部国際文化学科を再編した国際文化学科が置かれている。コース編成とし

ては、1年次には全員が共通コースに所属し、2年次以降は学生の関心に応じて、英語コミュニケーションコース、欧米文化コース、アジア文化コースに分かれる3コース制を取る。

国際文化学科の専門的な学問領域は、文学、言語学、比較文化学、歴史学などを含む地域文化研究及び比較文化研究である。こうした学際的側面を持つ教育研究を通して、固定観念にとらわれない幅広い視野と柔軟な思考力を培うとともに、文学部教育の伝統を継承した少人数ゼミによる思考力と表現力の鍛錬を行う。そのため、国際文化学科の1年次には広く文化を学ぶための入門として、複数教員によるリレー式講義の「国際文化概論」と「国際言語概論」を置く。「国際文化概論」では、世界の文化の多様性と文化研究の多様な観点を理解することを目的として、英米、ドイツ、フランス、中国、韓国・朝鮮に関する文化研究の入門的講義を行う。「国際言語概論」では、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国・朝鮮語についての概要を学ぶことで言語の多様性と言語と文化のつながりを理解し、多言語状況への対応力を高めることも目指す。そして、コースを選択して分かれる2年次以降には、少人数ゼミ（1クラス平均16名）での密な指導や議論の積み重ねによ

り、約2万字におよぶ卒業研究の完成に至るまで時間をかけて思考力と表現力を鍛え上げる。

そのように文学部の伝統を受け継ぎながらも、国際学部では体験に基づく学びや実践的コミュニケーションを通じてた学びを重視し、2年次には全員に「実践文化演習」の履修を義務付けている。「実践文化演習」には、海外での語学研修や文化研修に加えて、街中での活動や合宿を取り入れ実践的に英語を学ぶ「English Workshop」「English Workshop & Camp」や、集中講義形式による初修外国語の語学集中科目、京都でのフィールドラーニング科目を用意し、海外でも、京都でも、学内でも、体験と実践を通じて学びを深めることができる。「実践文化演習」に代えて（もしくは加えて）、1年または半年の間、海外への正規留学や交換留学、あるいは語学留学に行くこともできる。また、教諭一種免許状（英語）の取得を目指す場合には、半年留学との両立が可能なカリキュラムが組まれている。

現場の知から学ぶという点では、日本航空およびJT Bの協力を得て開講される学科専門科目「グローバル・キャリア論」も特徴的である。両社の講師からグローバル社会における仕事の現実を学びつつ、ホスピタリティやマーケ

ティングなど、現代社会の実相と課題について考える産学連携型の講義である。

## 5 人間教育に根ざした コミュニケーション能力の養成

現代の日本では、第一次産業からコンビニエンスストアまで、様々な労働現場で外国人や外国にルーツを持つ人々が働き、地域社会で生活している。そのため、私たちに求められるのは、文化的背景の多様な人々と共に仕事し、生活していくためのコミュニケーション能力である。それは、語学力や表現力といった単なるスキルにとどまるのではなく、自己のあり方を問いながら他者を尊重し、宗教も含めて相手を理解しようとする開かれた知性と人格の持ち主だけが発揮しうる、いわば人間的な総合力の一側面である。大谷大学国際学部が養成を目指すのは、そのように人間教育に根ざした共生のためのコミュニケーション能力であり、それこそが、貿易や旅行・観光といった「国際系」の仕事にとどまらず、今後あらゆる分野の職業において本当に必要とされていく力ではないだろうか。